シンガポール植物園

藤　本　義　昭

シンガポール空港に着いたのが1973年11月18日午前10時過ぎ，すぐホテルに荷物を置き，午後から植物園見学。

世界三大植物園の一つというだけあって広大な面積，それよりもここを訪ねる人々は入園無料である。そして園内は落葉一つなく掃き清められている。全ての植物が赤道直下に近いこの地で亭々とそびえるが如く生育しているのに驚いた。

夕方までゆっくりと園内を見学し，翌19日にまた朝から植物園へ，シャツ1枚になり，流れる汗を拭いながら植物を見，カメラに収める。昨日の落葉一つない理由がわかった．午前10時頃までは大勢の園丁が撒水，落葉の清掃に忙しく立働いていること。また，あちこちにごみ籠があり，見学者もごみを捨てないので美くしいわけだ。（マレーシャもそうであるが，ゴミを捨てたり，吸殻をほると現地ドルで罰金は500弗である）

10時過ぎから事務所を訪ね，標本室を見せてくれるよう交渉，結局園長の所へ行き，自分の研究論文を渡し，イネ科の標本を見せてもらうことになる。このとき事務所から園長室へと案内してくれたやや横柄な係員も，園長の許可がでると親切になり，標本室へ案内してくれる。

木造の標本室の一階には10数人の人が働いている。見ると標本作りである。乾燥する者，台紙に貼りつける者ラベルを貼る者，そして出来た標本はまとめてドクターの所へ，ドクターは別の研究棟でこれらの同定，研究を行なうのである。自分で採集し，標本に作りあげ，そして研究するのと大した違いである。

Dr. Chang Kiaw Lan

3階の標本室で，イネ科標本を次々と取り出してもらい，検討し，産地，特徴等を記録する。11時過ぎに，1人の女性が入ってきて話しかける。

「今，園長から聞いてきたがイネ科の研究だとか，私もイネ科の分類をやっている。あなたの論文が欲しい。またこのような暑い部屋でなく，私の研究室を使いなさい。冷房してあるから。」

と，わざわざ言いに来てくれたのである。そして彼女は私の案内をしていた男に，私のかばん，標本を運ぶように指示する。私はカメラ，ノートをぶら下げて隣の研究棟に行く。

彼女は Dr. Chang Kiaw Lan で，10坪あまりの研究室を持ち，その隣に6坪ばかりの標本を調べるための部屋を持っている。私をこの標本を調べるための部屋に案内し，クーラーのスイッチを最強にしてくれ，今までの汗はうそのようである。

しばらくイネ科，特に私の論文のことからシバについての話がはずむ。男はせっせと標本を運びこんでくれる。先にクアラルンプールの本屋でマレー半島植物誌5巻を求めたが，イネ科に関する記載が20数ページしかないことを話すと，シンガポール大学から出版されたマラヤ植物誌の中にイネ科だけの1冊があることを教えられる。入手法を尋ねると市販されていないとのことで，

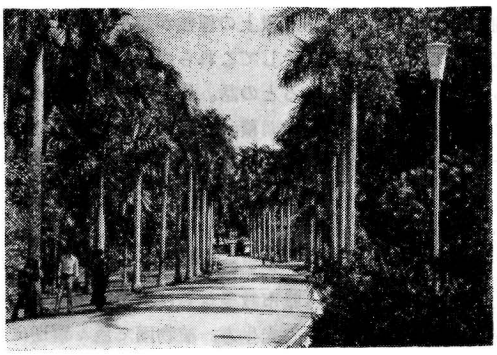


図1．シンガポール植物園

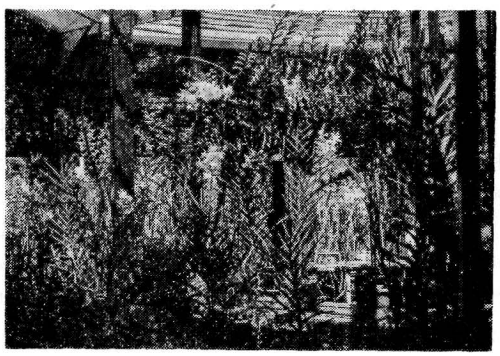
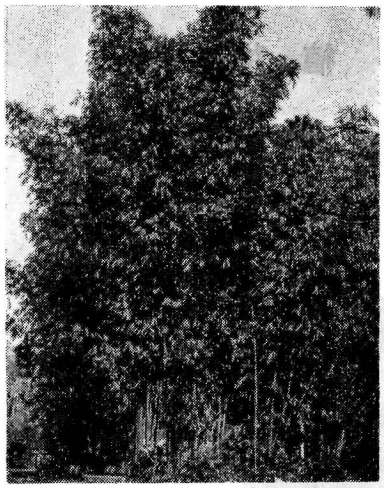


図2．蘭の展示場

図a



図b

図c

図d

図3．a～d　Schizostachyum brachycladium
a：株のようす　　b．c．d：金明タイプの葉，枝条のようすを示す

「是非いるか」と言うので「必要だ」と答えると，「それでは今からシンガポール大学まで行ってくる」との話。私は1人残され，植物標本を調べていた。午後4時過ぎ，本をたずさえて来てくれた。Dr. に好意を感謝する。

マレーシャのイネ科，バンブーの話。日本のイネ科，竹，笹について話がはずむ。5時過ぎに礼を述べ帰ろうとすると，「明日も来るだろう」と言うので「明日は仲間たちと日本に向けて出発する」と答えたところ驚いた表情で，「君はここへ何をしに来たのか，園内の見学だけでも2～3日はかかる。君の専門のイネ科標本もほんの一部しか見ていないではないか。」と，私も返事に困ってしまったが，事情をいろいろ説明し，再会を約して別れた。（そのとき，日本のシバ属の種子を取り揃えて送って欲しいと依頼され，また標本の交換も約束してきたので，帰国後これらの資料をとり揃えたり送るのに忙しかった）。

ところで，シンガポール植物園が，入場無料で，研究室を持ち，大勢の従業員をかかえられる理由は，ここの蘭栽培は世界の蘭の95％以上の種類が集められ，改良研究されていると聞く。そしてこれらの蘭を海外に販売する利益で運営されているとの話。長い歴史の間に蒐集された多数の植物，広大な面積，合理的な経営が可能にさせたものであろう。

もう一度，ゆっくりとした日程で訪れたいと希望している。

最後にこうした東南アジアの短期研修旅行の機会を与えて下さった文部省，県市教委ならびに東舞子小学校の校長，教頭はじめ同僚の先生方，植物園で色々親切にして下さった Dr. Chang にお礼申し上げる。